幻視の文学1985

幻想と怪奇とファンタジーの饗宴

日本幻想文学の新地平をひらく気鋭の新作14篇

澁澤龍彦・中井英夫選

第1回幻想文学新人賞発表!!

幻想文学会出版局■定価1300円

名古屋工業大学図書館
蔵書印

幻視の文学1985
一九八五年五月二五日印刷
一九八五年五月三〇日発行
著者代表　天沢退二郎
発行者　川島徳絵
発行所　幻想文学会出版局
東京都新宿区西早稲田三―五―十九
電話　〇三―二〇三―二九五三
振替　東京八―六九三八八
印刷所　大明印刷／末広印刷
製本所　豊友社

幻視の文学1985

幻視の文学1985 目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

幻視の文学1985——招待作品

5 土神の夢　天沢退二郎
19 海の音　須永朝彦
33 眠れる美女　山尾悠子
39 出づるもの　菊地秀行
53 鬼哭　田中文雄
69 猫と同じ色の闇　森真沙子
87 闇に用いる力学　竹本健治

第一回幻想文学新人賞——選評

110 もっと幾何学的精神を　澁澤龍彦
114 七いろの翼　中井英夫

第一回幻想文学新人賞——入選作品

119 少女のための鏖殺作法　加藤幹也
145 釣人　加城健夫
155 緑の壜　塩田長幸
173 あらかじめ失われた恋人よ　宇井亜綺夫
193 ざりがに　後藤義久
213 毛のふさふさした動物の不思議な味　青木隆二
233 召されし街　牧野みちこ

118 受賞の言葉
254 編集後記

表紙・口絵　建石修志

土神の夢／天沢退二郎

●天沢退二郎（あまざわ・たいじろう）

詩人・ファンタジー作家としての活躍は云わずもがな、評論家としても宮沢賢治をはじめ泉鏡花や石川淳らの幻想性にいちはやく注目していた作者の新作を本書の巻頭に掲載できることを嬉しく思う。泰西聖杯伝説の神秘と日本古来のアニミズム的幻想が交錯する傑作長篇ファンタジー『光車よ、まわれ！』《三つの魔法》三部作（ともに筑摩書房）に続く新作長篇を現在構想中。

土神の与平が何年ぶりかで目をさまして、気がついてみると、どうやらもとの工場の中庭の、長円形をした池の縁石に、いぎたない恰好で、のけぞるようにして寝ているのだった。ラクダのシャツのすそがズボンから出て、へそまで丸出しになっている。いくらふつうの人間の眼には見えないからといって、まれには土神や精を見る力をもった子どもがいることだってあるのだし、そうでなくても、あのおひゃらかしの乙姫とか、天人とか、花の精のいたずら娘どもとかがひらひらと空をとおりかかって、おれを指さして笑ったかもしれない。そう思うと恥かしさで身がちぢんだ……それに、だらりとのばした左手の袖のあたりが、池の水に浸って、すっかりぬれているではないか。土神の与平はぞくっとして、身体を起すと、あらためてのろのろとあたりを見まわした。

なんだかうすら寒いと思ったら、季節はまだ春さきのようだった。立ち枯れたカンナの株が、ぴらぴらと風にふるえている。そしてそのすぐむこうに、見おぼえのある赤レンガの工場が建っている。

けれども、そのてっぺんの煙突から、煙はのぼっていなかった。それどころか、煙突は先の方がまっ黒にこげたまま、半ぶん崩れかかり、その下の建物にも大きな裂け目ができて、裂け目の間からは、何やら灰色のくずのようなものがびっしり中につまっているのが見える。

そういえば、人間どものけはいもしない。この工場もつぶれたのか。何か事件でもあったのだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ろうか……土神の与平は記憶の中をさぐってみた。何かが……

わからない。

土神の与平は、ふらふらと立ち上がった。身体のどこに重心をおけばいいのかもわからない。よっぽどひどい様子をしてるのではないだろうか……縁石に手をついて、水面をのぞきこんだ。べつに気取ったわけではないが、前はよくそうやって、水鏡にうつして身づくろいをしたものだ。

ところが、池の水はどろりとうすみどり色ににごって、何ひとつうつっていなかった。もちろん土神の与平の顔など……。おかしい、これはどうしたわけだ？　たとえ工場の中庭の、コンクリートの縁石で、ぐるりを囲まれた池といっても、これはただの水たまりではない。れっきとした地下水脈に通じていて、わずかずつでも、澄んだ清水がいつも湧き出ていたはずなのだ。

さてはおれが眠っているうちに、何かあったな。

与平は胸がざわざわっとした。

ふらふらする身体をどうにか立てて、土神の与平はゆらりゆらりと池をはなれ、工場の建物に近づいた。

たしかに操業はとまっている。巨大な二枚の鉄扉はあけ放たれたままで、くらい内部をのぞきこむと、機械の類は何もかもはこび出されたらしく、がらんとしてカビのにおいもしない。

カラカラ、カラカラ……

とうつろな音をたてるのは、ずっと天井ちかい高さにとりつけられた、三枚羽根の換気扇だ。スイッチが入っているわけではない。勝手に通りぬける風のままに、カラカラ……とすこしまわってみては、風がやめばまたぼんやり、次の風を待つだけだ。前は電気でまわるのが、さも自分が

えらいみたいな顔をしていたくせに、ふん、なんというまぬけづらだ！

中へ入ってみるまでもない。土神の与平は入口の前にしゃがみこんで、マンホールのとってをさがした。レンガの破片だの、石炭の粉だの、やけにらんぼうに踏みならしてあるが、マンホールの蓋はすぐ見つかった。とってをつかんで、えいやっと持ち上げる。土神の与平じまんの怪力、これは何年眠っていたあいだにも、おとろえたけはいはなかった。

ザザザザザ、ズズズーン！……

レンガの破片や石炭の粉がすべりおち、ぽっかりあいた暗い穴に、その音がこだまする。土神の与平は思わず息を吸いこんだ。けれどあのかぎなれたわるいにおいは……いや、あのわるいにおいが、ちらっと鼻のおくにさわったような気がした。

すっかりかぎなれて、まず何とも思わなくなっていた土神の与平でも、それがいいにおいだと思っていたわけではない。胸のすみずみまでしのびこんでなかなか出ていかない、わるいにおい。うすぐろく、かすかに青ずんだ工場廃水の、その色あいがそのままにおいになったような、いやあなにおい。

逆にいえば、そのにおいがそのまま液化したような、なまぬるい臭い水が、マンホールをいつもいきおいよく流れていたのだった。その頃、土神の与平はここからその流れにするりと入り込んで、頭もなにもずっぷりともぐったまま、両手両足をのびのびとうごかして、下流の方へよくさんぽにでかけたのだ。その下水道には、途中の右や左に、四角い小さな孔があって、さまざまなにおいや味のする、人間の家々の下水が流れこんでくる。

それで結構ふくざつな、においや味の下水川を何十分か下ると、とつぜんパッと明るくなって、流れは広やかな田んぼの中の、コンクリートで護岸した水路へとそそぎこんでいくのだった。その、パッとひらける感じが、土神の与平には、とても気持がよかった。ちいさな滝になって水路へ入る、その直前に、左から木イチゴのやぶが枝をのばしている、そのトゲトゲの枝をやっとばかりにつかんで、野ぜりのじくじく生えた岸から土手に上がり、ぬれたラクダのシャツをかわかしながら一服する。これが土神の与平の、まことささやかなたのしみだった。そこから眺めると、田んぼのむこうをさえぎる丘に、さえぎる丘のふもとに、一本の、一本の木が……

とそこまでぼんやり思い出していって、土神の与平はどきんとした。一本の木、何だったろう？　その木がどうしたのだ？　はげしいよろこびと、はげしい苦しみとが、どうにも思い出せない記憶の中で、重なりあいながらうごめいた。苦しい……土神の与平は左の手のひらをひろげて胸にあてた。われながら、なんて大きな、細い、青じろい手のひらだろう！　それでもこの胸苦しさはしずまらない……いや、すこしずつ、しずまった……とにかくこれは、自分の目で、自分の足で、たしかめに行かねばなるまい。

土神の与平は左手で胸をおさえたまま、右手で穴の縁につかまって、そろりそろりと中へおりた。

ほんとうに、あれから何年もたったのだ——と、土神の与平はいまさらながら思った。土管をつなぎあわせた下水道の中はすっかりかわいて、以前にあの臭い水が流れていたあとなどは——そういえばかすかにのこっているような気のするこのにおい以外には——まったく見あたらない。

土神の与平は、うっすらと土ぼこりのようなもののつもった上を、腰をかがめながら、黄金色の目をひからせてゆっくり歩いて行った。右や左の、四角い横穴からも、何も流れこんでいない。いったい人間たちも、このあたりに住むのをやめたのだろうか？　土神の与平はふと足をとめて、そんな横穴の中をのぞいてみた。すると、かすかに水音がきこえた。む？　やっぱり使っているのか？　けれど、その水音はいっこうに近づいて来るけはいがない。

どうやら、上の方に、人間の暮しはあいかわらず続いているらしい。ただ、どういうわけか、この下水道は見すてられた、ただそれだけのことか。

土神の与平はまたあるき出した。下水がたっぷり流れていたときは、あんなに気楽にすいすい泳いでゆききできたのに、こうして歩くと、なんとまあ、道がはかどらないものだ……

それでもやがて、下水道は右へカーブをはじめた。どんどん曲って、どんどんカーブして、それから直線になったと思ったらすぐ、パッと田んぼがひらけるはずだ。土神の与平は、また胸がどきどきしてきた。

それも、気のせいばかりではなかった。

ほんとうに心臓がどきどき波打って、その音が、頭の中にこだまし、耳を内側から叩きつける……いや、内側ではない、いつか、下水道の中ぜんたいが、ガンガンと鳴り出していた。

ジャンジャン……という、鉦を叩く音もきこえる。

火事だ！

火事？　どこが？　どこだって！

思い出した！　土神の与平の、よじれるような記憶の道すじの途中のところへ、いきなり赤黒

いかたまりのようなものがとびこんできた。
思い出したぞ！
ごうごうという音と熱風とが、下水道の中をかけめぐったのだ。そして土神の与平は、わきかえる臭い水にむせながら、しっかりと両手でマンホールのへりをつかみ、頭をぶちあてるようにして蓋を外へはねのけたのだ。
夜空がまっ赤だった。
工場の煙突が、火山のように炎を吹きあげ、そのいきおいで、煙突の先が崩れ出していた。真赤な火の玉が、ゆっくりと尾を引きながら、空いちめんに舞いおりてくる。それは、たいていは地面にとどく前に、黒い灰のかたまりに変わるらしかったけれど、いつまでそんなことですむものか。もう真赤にやけただれたままのかたまりも、あちこちに落ちはじめていた。
そして、はげしい炎の音と、熱風と、工場のまわりをかけめぐっているらしい消防車のサイレンや鉦の音にまじって、あの、泣きわめく声がきこえたのだ——
「助けてえ！」
「熱いよう！　熱いよう！」
いや、そんな言葉になっていたわけではない。しかし土神の与平にはわかったのだ、その意味が、そして、誰が助けを呼んでいるかも……
しかし、どうしてわかったのだろう？　これは今でもふしぎだ。
しゅるしゅると音たてて降りおちてくる火の玉と灰のかたまりのあいだをぬって、土神の与平は、その声の方へ走った。

赤い空をまっ赤にうつしている長円形の池のへりを走りぬけ、雨ざらしの古材置場をはねこえて、塀の下の、百年ちかく前から人間どもに見すてられた土神のみすぼらしい祠(ほこら)の上に、枝をしげらせているビワの木……

そのビワの木から、何十箇となくついているわかいビワの実たちが、いま本体をあらわして何十人という美しい少女たちに変わり、枝に吊りさがりながら泣きわめいているのだった。

「熱いよう！　与平さん、助けて！」

「与平さん！　与平さん！」

少女たちは、土神の与平が走ってくるのを見つけて、口々に叫んでいる。

駈けよって、しかし、何がしてやれるのか？

土神の与平にもわからない。それでもとにかく、何とかしてやらなくては！　土神の与平の足がもつれた。泥くぐりも水もぐりも得意な力持ちの土神も、地面の上を走るのは、空をとぶことの次に（なに、とべやしないのだが）にがてなのだ。

「与平さん！」

土神の与平がころびかけたのを見て、ビワの実たちが悲鳴をあげた。

何の、これしき！　土神の与平がぐいっと、へなへなする足をふんばったとき、

ゴオッ！

その与平の頭上を、うなりをあげて、火の玉どもがまるで何十何百、かたまりになってとびこすと、ビワの木にまるでぞっくりとかぶさるように落ちたのだ。

ビワの実たちは、もう叫ぶひまもなかった。ビワの実いろのひらひらしたきものが、いっせい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c